奈良県 いのちの教育

令和６年度「いのちの教育実践研究事業」

奈良県が目指す「いのちの教育」

- 動物への思いやりを深め、「いのち」の大切さを実感させる。
- 他者との関わりを深めながら、情操を豊かにする。
- 野生生物を含む自然環境の保護についての理解を高める。

「いのちの教育プログラム」とは？

うだ・アニマルパークで実施している「いのちの教育プログラム」では、私たちと動物との関わりに気付き、動物にも感情や要求（ニーズ）があるということ、動物の「いのち」が私たち人間と同じであることを感じ、それぞれの動物の「いのち」がよりよく生きるために私たちがどのような責任を負い、果たすべきなのかを考えます。

「いのちの教育実践研究事業」とは？

奈良県教育委員会は、うだ・アニマルパークにおける動物とのふれあい等を生かした「いのち」に関する学習を核に、教育活動全体で生命を尊重する心を育てる実践的な研究を行う「いのちの教育実践研究校」を指定し、その取組を県内に広く知らせています。

令和6年度は奈良市立佐保台小学校と宇陀市立榛原東小学校を指定し、取り組んでいただきました。

うだ・アニマルパークについて

宇陀市大宇陀の県畜産技術センターでは、60年以上にわたり、牛・豚・鶏などの試験研究を行い、様々な成果を上げています。平成13年4月に大家畜（牛）部門が宇陀郡御杖村の「みつえ高原牧場」に移転したことによる敷地の有効活用として、動物とのふれあいを通して次代を担う子どもたちの健全な育成を目指すとともに、県内外のみなさんにレクリエーションの場を提供し、社会全体の発展に寄与することを目指し、うだ・アニマルパークを設置することにしました。

うだ・アニマルパークは、人と動物とのふれあいを通して、動物を学び、動物から学び、そして動物のために学ぶ「いのちの教育」を行い、広く県民に、動物全般に対する理解を促進するとともに、動物に対する愛護の思想について普及啓発を図り、豊かな社会づくりに寄与することを目的とした施設です。

奈良市立佐保台小学校　第1・2学年

『みんないっしょに生きている』

【研究課題】

本校の地域は、落ち着いた住宅地である。地域内に8つの公園があり、緑が多く、四季折々の木々や草花の様子を見ることができる。全校児童は190名。学校目標として、『豊かな心を持ち、自ら学び、最後までやり抜く児童の育成』を掲げ、「自ら学ぶ子」「とことん学ぶ子」「つながり学ぶ子」「地域に学ぶ子」の育成を目指す。

子どもたちは、人にも生き物にも優しい子が多い。低学年では、生活科の自然探検の際、虫を見つけて教室で観察し、飼い方を調べてお世話した。また、1年生はアサガオやサツマイモ、2年生はミニトマトや夏野菜の栽培を行っている。いのちの教育プログラムに参加し、1年を通して生き物や命についての学習を系統的にしていき、子どもたちの人権意識も高めていきたい。

【成果】

学校では1年を通して植物の栽培を行い、観察や収穫に楽しんで取り組んだ。また、いのちの教育プログラムや、本を通して動物の命について考える機会をもち、自分たちが動物や植物の命と深く関わっているということに気付くことができた。自分が飼っているペットや家畜、野生の動物について、それぞれが人間と深く関わっており、その上で人間が生かされているということを学ぶことができた。子どもたちは、この学びを、人間の誕生や成長について学習する生活科「これまでのわたし　これからのわたし」につなげていき、人間も動物も植物もつながり合って生きているのだということを実感することができた。実践後、図書室や学級文庫で動物の本を手に取り、興味をもって読んでいる児童の姿が多く見られるようになった。この学習が途切れることなく続いていってほしいと願っている。

【取組の概要】

○いのちの教育プログラム

「いのちの授業」を一年間を通して受けたことで、動物に対する思いや食べ物に対する思いが変わっていった。授業で命を考える機会があり、ただ話を聞くだけでなく、自分で考える活動があったからだと考える。

○植物

・生活科（１・２年生）

ミニトマト、ナス、ピーマン、キュウリなどの夏野菜の栽培、チューリップの栽培。植物の栽培活動は、動物たちと同じく自分たちにとって欠かすことのできない大事なものであるという気持ちをもち、愛着をもって栽培することができた。

○自分のいのち

・生活科（１年生）

自分たちの心臓の音を初めて聴いた。人により速さや音に違いがあることを知った。

・道徳科「かさぶた」（２年生）

爪や髪の毛が伸びるなど、毎日体は変わっていくことから、「生きている」とはどんなことかを考えた。

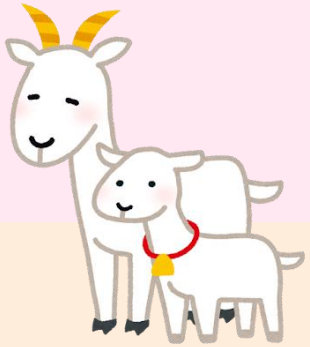
植物　～アサガオ・夏野菜・サツマイモの栽培～

１・２年生の生活科では、アサガオ、夏野菜などの栽培活動を行った。自分たちと同じで水がないと生きることができない、栄養がないと大きくなることができないということを学んだ。水やりの場面では、互いに声を掛け合い水やりを行う姿や、草引きをする活動では、植物を育てることの大変さを体感していた。花が咲いたり実が成ったりする様子に喜びを感じ、特にさつまいもの収穫では、大きく実ったさつまいもに喜びの声があがった。

人間～生活科「これまでのわたし　これからのわたし」～

２年生【生きているって】
「生きている」からできることには、どんなことがあるかを考えた。「友だちと遊べる。」「勉強できる。」「おいしいものを食べる。」「おうちの人にぎゅっとしてもらえる。」などの声があがった。
【感じよういのち】
自分たちの心臓の音を初めて聴いた。音の様子や、人によって速さや音に違いがあることを知った。

動物～いのちの教育～



【児童の日記より】

「ヤギやヒツジにさわったら、とてもやわらかくて温かかった。」
「ヤギがつのをぶつけて、けんかしていてすごいなと思った。」
「小さいウマがかわいかった」
動物に対して愛おしさや温かみを感じることができた。

「自分のペットのおせわをがんばろうと思った。」
「かわいがることも大切なおせわだと思った。」
「きゅう食を今日からのこさず食べる!」
生活の中での動物の存在について確認することができた。
給食もなるべく残さず、食べようとする児童が増えた。

うだアニマル・パークを訪れた。動物たちのために私たちができることを考えた。これまで学んだことや考えたことをもとに、一人一人が何ができるのかを一生懸命考える姿があった。また、実際に動物たちの暮らしを見たり、触れたりすることもできた。ヤギと羊に餌をあげる時、自分たちにとっての食べ物と同じなので、落ちた草はあげられない、優しく動物の口に近づけるなど気をつける様子もあった。教室だけでは、感じることができない体験ができて良かった。

宇陀市立榛原東小学校　第2学年

『いのちにかんしゃ』

【研究課題】

本校の北東部には、山容の美しい額井岳（別名：大和富士）がそびえ、豊かな自然に囲まれている。また、古くから人々の行き来が盛んな地域であり、伊勢街道を示す道標が校区に残っている。

本校の２年生は、１年生の生活科で朝顔を育てるなど、植物との関わりはあり、学習する機会も多い。２年生になり、夏野菜やサツマイモを育てる活動をしているが、声をかけないと水やりに行かない児童がいる。また、動物は飼育しておらず、動物との関わりについて学習する機会はほとんどない。今年度のいのちの教育や生活科の学習で、いろいろな生命に触れる活動を通して、いのちについて興味をもち、より一層いのちを大切にする心、いのちに感謝する心を育みたい。

【成果】

子どもたちは、今まで、動物をひとくくりとして考えていたが、それぞれの環境や生活を知り、動物と自分たちとの繋がりを学ぶことができた。また、動物には、人間と同じように大事にされるべき命があり、感情があることに気付き、自分たちが動物のためにできることを考えることができた。野菜の栽培に関しても、自ら水やりに行き、成長を楽しみにしている姿が見られた。気候の都合でうまく育たないこともあったが、種を植えると必ず育つとは限らないことや、植物にも「いのち」があるということを知ることができた。

動物や植物の「いのち」だけでなく、人間の互いの「いのち」の大切さを考え、行動できるように指導していきたい。また、これまで学習したことを忘れることなく、引き続き学級でも「いのち」につながる学習に取り組んでいきたい。

【取組の概要】

○「いのちの教育」プログラム

・「私たちと動物のつながり」出前授業
・「動物と私たちの『命は同じ』」
　宇陀アニマルパーク
・「動物のために私たちができること」
　出前授業

動物や人間との関わりについて考えることができた。

○植物・生活科（２年生）

ミニトマト、ナス、キュウリなどの夏野菜の栽培。
植物の命も、動物たちと同じく自分たちにとって欠かすことのできない大事なものであるという気持ちをもち、愛着をもって栽培することができた。

○国語科

・第3回奈良県「いのちの作文コンクール」への取組

一人一人が自分の身の回りの「いのち」に向き合う機会にできた。

・「見たこと、かんじたこと」

おうちの人へのかんしゃをテーマに詩を書いた。

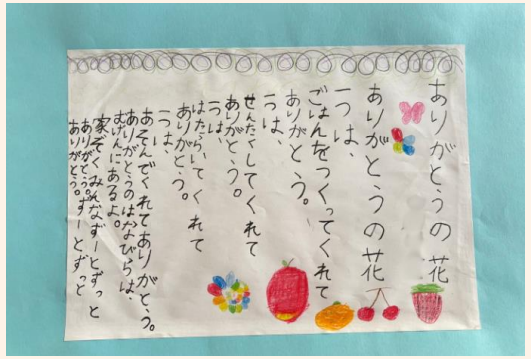
「ぐんぐん育て 私の野菜」

夏野菜（きゅうり・ミニトマト・なす）の苗を植えた。大きくなってきた野菜をタブレットで写真で記録した。「花がさいていた。」「みどりのミニトマトができていた。」などよく観察していた。できた野菜を収穫する喜びを味わうことができた。「ちょっとすっぱかったけどおいしかった。」「家ぞくにも食べてもらった。」と感想を書いていた。

早く大きくなってね！
大切に育てよう

秋には、さつまいもの収穫もした。一生懸命土を掘って、さつまいもの収穫をすることができた。収穫したさつまいもを使って、芋版を作成した。

「これまでのわたし これからのわたし」



自分自身のこれまでの成長の記録を絵本にしてまとめる活動を行った。家の人にインタビューをし、自分が生まれたとき、１才のとき・・・と自分の成長の記録を言葉にしてまとめることで、自分自身がみんなに大切にされてきた「いのち」であることを感じることができた。

国語科の「見たこと、かんじたこと」との合科型の授業を行った。大きくなったことやできることが増えたことは、多くの人の支えがあったことに気付き、感謝の気持ちを表すことができる取組になった。児童自身が、自分を見つめ直し、日頃の感謝の気持ちを詩で表すことができた。

生命の誕生 ～ゲストティーチャーを招いて～

ゲストティーチャーに助産師さんを招いて、「いのち」の誕生についてや小さな「いのち」が大きくなっていく過程、出産の大変さなどを教えていただいた。実際の重さの赤ちゃんの人形を抱っこさせてもらったり、おなかの中にいる赤ちゃんはどんな様子で過ごしているのかを体験したりした。話を聞きながら、自然と「ありがとうやなあ。」と呟く児童がいた。

【児童の感想】

- 小さな小さないのちから大きくなっていくのを見て「赤ちゃんて、こんな感じで大きくなっていくんだな。」と思いました。
- いのちは大切って知ってたけど、思ってた「ばい」 に大切と分かった。
- 赤ちゃんはかしこくて、いのちの道はせまいのに通れるなんてすごいなあと思いました。
- お母さんはいのちがけでぼくを産んでくれたんだなと思いました。

いのちの教育プログラム

【児童の感想】

- 心臓の音がはやい人もおそい人もいることがわかった。
- ごはんは、いのちを食べてるから、これからはごはんを残さず食べようと思います。
- わたしの心ぞうの音は、はやくなって１回止まってのリズムになっていた。友だちの心ぞうの音は、すごくはやくて「だっだっだ」といっていた。
- 動物に、優しく大事にしようと思いました。
- 人間と動物は、つながっていることがわかった。
- 自分の心ぞうの音を聞けてよかった。いのちって大切なんだと思った。
- 動物にも心やいのちがあることが分かった。いのちの大事さが分かった。
- ぼくは、動物の卵やお肉などを食べて生きている。もっといのちのつながりを大切にしたいと思った。
- あらためて、ごはんを食べられるのはありがたいと思った。